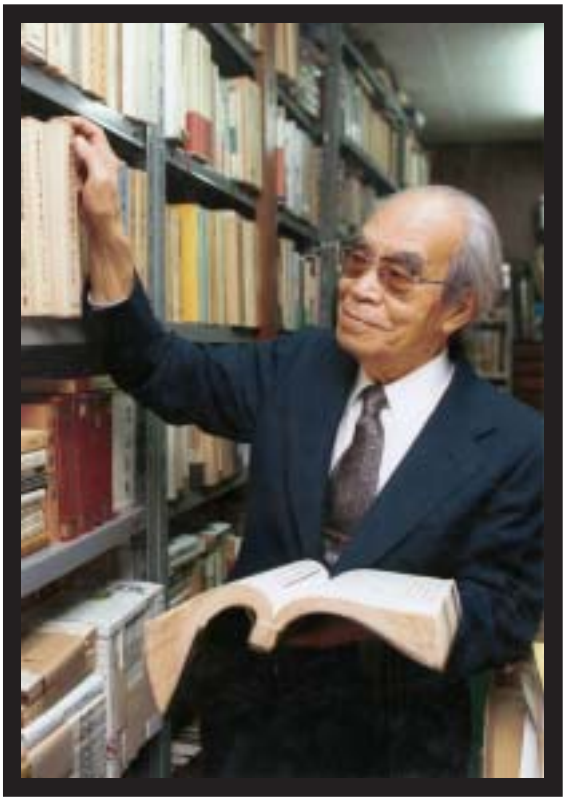
白川研究所便り



白川静先生御遺影（御自宅書斎にて）

第２号
発行
07.3.30

立命館大学
白川静記念東洋文字文化研究所
〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1
電話 075-466-3470
Mail toyomoji@st.ritsumei.ac.jp
URL http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/sio/index.html

目次◆index

白川静先生ご逝去 …… 2
白川先生追悼の言葉 …… 3
研究所長 川口清史
白川静先生の御功績 …… 4
学外顧問 加地伸行
白川先生を偲んで …… 6
…先生のエートスに触れつつ…
本学名誉教授 西川富雄
白川先生に伝えたかったこと …… 8
本学非常勤講師 高島敏夫
白川静先生の経歴 …… 10
二〇〇六年度 学術研究事業運営委員会の活動 …… 11
研究員 芳村弘道
二〇〇六年度 文化事業運営委員会の活動 …… 14
運営委員 志垣陽
第一回立命館白川静賞 …… 15
選考委員長 高杉巴彦

白川静先生ご逝去

立命館大学名誉教授、立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所名誉研究所長、白川　静先生におかれては、二〇〇六（平成十八）年十月三十日、多臓器不全により逝去されました。享年九十六歳。

白川先生は立命館中学校教諭、立命館大学教授、そして名誉教授として実に七十余年もの間、文字学の発展と本学園の教育研究に尽くしてくださいました。

十二月七日、ホテルグランヴィア京都・源氏の間で「白川静先生お別れの会（学校法人立命館主催）」が執り行われ、各所、各方面から先生を偲ぶ六五〇名の方が参列されました。黙禱、長田豊臣総長（当時。当研究所研究所長）による告別の辞と続き、長田総長は「白川先生は立命館出身研究者の精神的支柱であり励みでした。先生の功績・情熱を受け継いで後進を育成し、創設いただいた『白川静記念東洋文字文化研究所』についても継承、発展させて参ります」と述べました。そして「在りし日の白川先生」を映像で振り返り、加地伸行・白川静記念東洋文字文化研究所顧問が先生の功績をご紹介、木村一信文学部長（当研究所副研究所長）が先生の愛読詩（薄田泣菫「白羊宮」から「望郷の歌」）を朗読しました。弔電披露に続いて、ご遺族を代表して長女の津崎史様が御礼の言葉とエピソードとして、研究一筋という印象の一方で、相撲・大リーグ観戦や囲碁・将棋などの趣味をお持ちだったこと、フィギュア・スケートの荒川静香選手のファンで、散歩の途中に「イナバウアー」をなされていたことなど、白川先生のまた違った一面を紹介されました。最後に行われた献花では、白川先生との別れを惜しむ参列者の長い列ができ、多くの方に慕われた先生のお人柄が表れたようでした。

在りし日の白川静先生

確実な論証に基づいて漢字の成り立ちを読み解かれた「白川文字学」の体系は、単に文字学だけの範囲に止まらず、中国古代哲学・文化はもとより、東洋全域にわたる民俗学、考古学にも及ぶ壮大なものとなりました。その研究は中国はもとより諸外国の研究者からも高い評価を得るに至り、先生は文化勲章受章を始めとする様々な賞の栄誉に浴されました。また先生は、東洋文字文化の発展、普及のため、「立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所」の設立に尽力されるとともに、最期まで広く講演の壇上に立たれるなど、精力的な活動を進められました。

「白川文字学」の体系は、決して天才的な閃きのみによるものではなく、膨大な数の亀甲獣骨に刻まれた甲骨文を薄紙に一つ一つ写し取るという地道なご努力が、その基礎となっているものです。そして先生は、孔子が人生の至境とした「芸に遊ぶ」という言葉を、先生もまた、ご自身のものとされていました。

私どもは、白川先生の数多のご功績を誇りとし、先生の遺された学問を継承、発展させるべく、努力いたす所存です。

ここに、白川先生のご功績とご遺徳を偲び、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

白川先生追悼の言葉

研究所長　川口　清史

白川静先生のご逝去から四ヶ月が過ぎ、不思議なほど暖かい冬を経て春を迎えようとしています。立命館総長の交代に伴い、前任の長田豊臣前所長の後を引き継いで立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所の所長を務めることになりました。しかしもう白川先生はいらっしゃいません。

白川先生のご逝去の報に接した時の衝撃はとても大きなものでした。十二月の「お別れの会」の時も、多くの方々が最後のお別れに集まられたのを見て、あらためて先生が遺された足跡の偉大さを痛感しました。しかし、立命館の総長として日々の執務をこなしてゆくなかでこそ、先生のご不在が大きな空白として感じられてなりません。

長田前総長が「お別れの会」の弔辞で述べておられましたが、先生はまさに立命館の研究者にとって導きの星であり、精神的支柱でありました。また、ご逝去後に実に様々なメディアによって先生のご業績が取り上げられ、立命館のみでなく、社会におけるその影響力の広さと深さをあらためて痛感いたしました。今、そうした先生のご業績を振り返った新聞記事などを読むと、一つのことに気付きます。先生の偉大さは、政府の委員会や学会の役職に就いていたとか、社会的な活動によるものではなく、純粋に学問の高みによるものであったという点です。まさに現代における唯一の「碩学」であったと言えるでしょう。

「お別れの会」で御挨拶の津崎史様

私の総長としての務めは、先生のような偉大な研究者を立命館から育ててゆくことですが、先生の足跡の大きさに、確信を持ってすぐにお応えすることができません。本当は先生には、我々の目標としてまだまだご活躍していただきたかった、これが正直な想いです。しかし、我々は先生が通られた道を知っています。偉大な学問の道標を持っています。

「学問は、結局は自分で調べ考え、作っていく以外にない。
学問はみんな独創です」

いつか、先生の後に続く立命館の研究者が、先生の精神を引き継いで学問の極みに到達できるよう、総長としての職に全力を尽くすことをお約束いたします。

告別の辞を捧げる長田豊臣前研究所長

白川静先生の御功績

学外顧問　加地伸行

白川静先生は、立命館大学に御在職中、詩経学・甲骨金文学・説文学ならびに日本古代文学の四分野にわたって研究されました。この四分野の関係は次のごとくであります。

先生は、『詩経』を中心とする中国古代文学の研究者でありました。その中国古代文学ひいてはその背景となる中国古代社会の研究におきまして、従来の諸研究が、たとえば儒教の表層である道徳性からの検討であったり、あるいは、基礎的条件の異なるマルクス主義歴史学を性急に適用しようとする解釈であったり、要するに古代以後の諸観念によるものであることに対して、白川先生は古代の文化や社会は古代そのものによって語らしめるべきであると批判されました。

そのゆえに、先生は二つの手順をお取りになられました。一つは、民俗学的方法であります。いま一つは、文章を成り立たしめている漢字自体の原義を明らかにして、民俗学的に位置づけるということであります。

ここから、甲骨文・金文資料や『説文解字』の研究が蓄積され、それとともに『詩経』の研究が深められ、さらにその展開として『万葉集』を中心とした日中古代比較文学研究が行われました。

この四者、すなわち民俗学的方法に基づいた詩経学・甲骨金文学・説文学・日本古代文学の研究は、多年にわたる丹念な整理と厳密な実証とにより、相互に連関しつつ有機的に構成され、体系化されていますがゆえに、われわれ後学はそれを白川学と称し申し上げております。

先生の御大作『甲骨金文学論叢』におきまして示された独創的御見解は、中国古代社会の宗教的実相をありありと現出するものであります。ふつうは「口（くち）」とされる漢字を、そうではなくて、神への祈りである〈のりと〉を入れる器の〈凵（さい）〉であるとする白川説は、『説文解字』登場後二千年来の伝統的中国文字学の基盤を根底から覆すものであり、この新解釈を含めた一連の諸研究によって明らかにされてゆきました中国古代宗教社会の実像は、広く中国古代史研究全体に革命を起こしたと位置づけても過言ではありません。

先生の説文学は、甲骨文・金文資料を扱えなかった、あるいは扱わなかった従来の『説文解字』諸注解を改め、『説文解字』の陰陽五行説に基づく漢字の世界観を、古代資料である象形文字の世界から再編成するという目的をもってなされ、『説文新義』全十五巻として完成されました。

「お別れの会」メモリアル室

「お別れの会」しおり

もっとも、この不朽の名著『説文新義』は、はなはだ難解であります。そのため、その趣旨を分かりやすくし、一般人向けに字書として編纂されましたものが『字統』であります。

次いで、日本人が国語として漢字・漢文を訓読し親しんできました伝統を、集積した諸資料によって示す字書の『字訓』が登場いたしました。これは、先生の日本への深い想いの現われと存じます。そして最後に、漢字熟語を収め、その用例を漢文のままではなくて、分かりやすく書き下し文で示すという、日本で初めての試みである字書の『字通』が刊行され三部作が完結しました。この白川学字書三部作は、今後、国民的字書として長く支持されてゆくでありましょう。

「お別れの会」の模様

白川先生の御功績紹介の
加地伸行学外顧問

このほか、先生は御研究内容を、一般人に分るように『孔子伝』をはじめさまざまお書きになられました。それらは表現こそ平易であれ、いわゆる啓蒙書ではなくて、あくまでも白川学の内容を示す著述でありますので、日本の学術書や学術論文に常に引用されております。白川先生御自身による白川学の普遍化でもあったと存じます。

また、それらは中身の濃さのみならず、重厚にして風格のある独特の文体の魅力のゆえに、あたかも直接に御講義を拝聴するような充足感を与えてくださっております。

一方、先生は漢字・漢文の将来について憂慮しておられました。漢字本来の形態や意味を破壊している現行の常用漢字や、根拠なき漢字制限という国語政策への御批判であります。また、近年の漢文教育の衰退がありました。その振興という教育面の充実も強く願っておられた白川先生は、莫大な私財を提供され、漢字・漢文に関しての、研究・教育ならびに社会貢献に資する研究所の設立を求められました。立命館大学はそれにお応えして、白川静記念東洋文字文化研究所を設立、今夏、第一回立命館白川静賞の授賞式が開かれ、白川先生が御出席になり、御挨拶をされました。それはわずか半年前のこと、もはや一場の夢のようなできごととなりました。

白川学は、語れども語れども、語り尽くせませぬ。あまりにも壮大広淵であり、またきわめて堅固であります。先生の御功績を述べて参りましたが、いま改めて白川静先生に対しまして、『論語』の中の孔子について述べられた一節と同じ感を深くいたしております。すなわち、「之を仰げば、弥々高く、之を鑽れば、弥々堅し」と。

（二〇〇七年十二月七日、「白川静先生　お別れの会」にて）

白川静先生を偲んで
…先生のエートスに触れつつ…

本学名誉教授　西川　富雄（哲学）

（イ）　すさまじき疾風怒濤の中にありて
　　東洋は崩れたり東洋は何處ぞ

（ロ）　大學に民主の嵐吹き荒れて
　　我は一介の反動分子か

これら二つの歌は、先生の「卯月抄」（桂東雑記Ⅲ　２００５　平凡社）のなかに見い出される。「卯月抄」は、先生に先立つこと、ほぼ二年七ケ月、九十二歳になる直前に亡くなられた奥様への追悼、追憶の歌である。さすがに、郷土の先輩には、万葉調の歌を詠う橘曙覧（あけみ）があり、研究者としても万葉集には格別に親しんでこられた先生のことである。くわえて、ポトナム派創始者・小泉苳三の弟子でもある。現実抒情というのであろうか。いちいちの歌には、心銘つものがある。一向に歌ごころを解せぬ小生ではあるが、それでも、おさめられた七十首に接して、今さらながらに、先生の人と思想への思いを新たにした次第である。しかしここは、それをテーマとするところではない。掲げた二つの歌をめぐって、先生のエートスのようなものに触れることで、先生の一面を偲ぶきっかけとしたい。

先般、「朝日新聞」第一面の「折々のうた」欄を、なにげなく見ていて、ハッとしたことがある。小泉苳三の短歌が、取り上げられているのである（２月２３日）。苳三には、「歌作による被追放者は一人のみ、その一人ぞと吾はつぶやく」という一首があるという。コラム担当者・大岡信は、苳三の、

「東亜の民族ここに戦へり
　　再びかかるいくさ無からしめ」

の一首の故に学園を追放されたことに触れ、この歌に、なんの不都合もない。まさに、「歌を読めない烏合の衆による血祭りにあげられた」のであろうと書いている。

小泉苳三とは、中川小十郎元総長に乞われ、立命館大学法文学部文学科、国語・漢文科の充実に画期的な寄与をした人であると聞く。白川先生が傾倒された師でもあった人である。先生は、戦後いちはやく、教職員の資格審査にあたった委員長が、戦前、戦中の「立命館禁衛隊長」であったことをアイロニカルに指摘しながら、それを主題にした二つのエッセイを書いておられる（桂東雑記Ⅲ参照）。それは、立命館百年史における、小さな、見方によれば大きな、一こまであったのであろうが、ここは、それを詮索する場所ではない。

いいたいことは、そうした歴史の動きの中で、いちはやく、先生は、（ロ）の歌に織り込んだ思いを、心情深く感じ取られていたのではないかということである。それは、戦後民主主義下における浮ついた進歩派への失望の思いであり、歌論的にいえば現実抒情であるかもしれないが、小学校を出ただけで、郷里・福井を出て、傍系から、学問の道に入られた先生の長年のうちに培われたエートスといってもよいのかもしれない。

先生を研究室に訪ねて閑談の時間をいただいているようなとき、時折、

「ぼくは、反動じゃからのう、あっはは！」と大笑されることがあったが、御自身は、決してそんな思いを持っておられたわけではない。歌には、アイロニカルな現実批判が、抒情として詠いこまれているだけのことであろう。

本来は、『詩経』と『万葉集』との比較研究を通して、古代中国と古代日本との社会的、文化的、精神史的解明を志しておられた先生である。古代漢字学の体系的研究に先んじて、すでに、それが、先生の学問精神のモティーフとなっていた。こころは、日本を含めての東アジアに、汎く、〝開かれて〟いたのである。

先生の生家は、城の間近く、侍町にあった。そう遠くない、いまは公園になったところには、先生が、やはり敬愛される先輩・橋本左内の像がある。左内は、吉田松陰と共に、当時の幕府主流から、疎まれ、獄舎に繋がれたことがある。かれのこころは、つとに、鎖国日本の外に出て、世界に〝開かれて〟いた。

先生は、回顧して、戦後、再生を図る学園では、「戦前派として常に疎外される立場にあった。私はいつも逆風の中にあり、逆風の中で、羽ばたき続けてきた」と書いておられる（桂東雑記Ⅲ）。

あの学園紛争の折にも、先生は、心動ぜず、朝から晩まで、ひたすら研究室で漢字学の研究に没頭された話は、有名である。晩年の先生は、よく、「私は学問の世界を遊んできた」と、語られた。先生において、「遊ぶ」とは、世俗の利害を超脱して、研究それ自体を自己目的として愉しむことである。また一方では、先生は、エッセイ、「狂の精神史」を書かれるほどに、「狂」の文字を好まれた人でもある。先生において、「狂」とは、超常の世界に生きて、対象、つまり古代漢字のなかに没入することをいう。「遊・狂」の精神の所産ともいうべき、白川漢字学大成に至る長い長い道程には、郷土・越前の厳しい風土性に培われた「なにくそ」精神があったのでもあろうが、先生の学問精神ということになれば、それは、本来、〝開かれた〟ものであったのではないか。失われつつあると見える「東洋のこころ」の再生を理念として掲げられるのも、その証しである。一見、没世間的と見える先生ではあるが、その卓越した古代漢字研究を通じて、先生のこころは、開かれていた。なにも、西欧を捨てて、狭く東洋に回帰せよ、というのではない。漢字文化を共有する圏域の世界史的意義を見据えてのことなのであろう。「開かれた」とは、そのことをいう。それが、（イ）の歌に織りこまれた抒情であろう。

それは、実現性の乏しい、ただのユートピアでしかない、とひとはいうかもしれないが、ユートピアとは、本来、現実を超えた彼方から、現実に訴えかけてくるものとして指導理念たりうるものである。長い間、疎んぜられがちな先生ではあったが、平成の橋本左内は、逆風の中にあっても、フェニクスとして、いついつまでもわれわれの内に羽ばたくことであろう。それを老生は希うものである。

前列、左から、
松本幸男、白川静先生、水田　潤、奥村家造、
後列、左から、
西川富雄、山尾幸久、清水凱夫（敬称略）

白川先生に伝えたかったこと

高島　敏夫

先生と話しをした最後は八月の下旬だった。歳の離れた兄が突然倒れ、入院するという出来事があって暫くしてのことだった。異常な猛暑の続いていた夏を元気に過ごしておられるだろうかとフト気になり電話してみたのだ。最近では電話をしても入院しておられたり、電話に出られる状態ではないことが多くなっていたので、様子だけでも知りたいと思ったのだった。看病しておられる娘さんの判断で、幸いにして電話に出ていただくことができた。「君、元気か？　今年の夏は今までと全然違うなあ。嫌らしい暑さやなあ。仕事が何もできなかったよ。」とおっしゃった。随分消耗されているのが直かに伝わってきた。いつも楽天的な先生だったが、この夏の暑さは別格だったようだ。それでも話しをし始めると例の熱っぽい調子が戻ってきて、執筆の計画など近況を色々話して下さった。「先生こんなに長く話して大丈夫ですか？」「いや、大丈夫だよ。」「こういう暑い夏はあまり仕事をせずにぶらぶらして、秋から始めた方がいいですよ。」「秋になったら、研究所にも一週間に一回は行くつもりをしている。その時は今後の研究所の活動について君とも相談したいのでよろしく頼む。」ということをおっしゃり、まだまだ意欲のあるところがうかがえたのだった。そして秋になってじっくりお話しができると楽しみにしながら受話器を置いた。

話しの中でその時執筆していた研究所の紀要に寄稿する論文のことにも少し触れた。しかしまだ書き上げていなかったので、具体的な内容まで話さなかった。後になって芳村教授からお聞きしたところでは、私の対論文の表題を見て、「高島は難しい問題ばっかりやりよるなあ。」と、笑っておられたということであった。実は、今回の論文には私の特別な思いがあった。というのは、今まで先生の説と対立するかのような様相を呈していた問題をめぐって、重要なことに気付いたからだ。それは根本的な対立ではなく、捉え方の視点あるいは発想が違っていたために、部分的に違う解釈をすることになっていただけだったことに気付いたのだ。そして今度の論文を書くことによって、先生の文字学も私の立てた説も生きてくるような新しい局面に入ることができる、という確信を深めるようになった。先生と直接お話をした時にはそのことを説明できる形でほぼまとまっていた。またそのことを伝えたくて電話をしたはずだった。

先生の文字学の最も中心にある重要な説は、言うまでもなく「㠯」字形がノリトを容れる器だとする「㠯」字形載書説である。しかしこの説を祝詞という言葉で説明すると日本のいわゆる祝詞に重なってくるため、混乱が生じる。どうしても日本の神社などで神の御前にて行なわれる形体化した祝詞と重なってしまうからである。しかし日本の古代においても、原初的な意味でのノリトは現在一般的に想定されるノリトとは違っていたはずだ。原初的なノリトは、本居宣長や折口信夫が述べているように、口頭で発する「王命」であった。「ノリト」は「宣り処」であり、そこから発する「王命」が「ノリトゴト」であるというのが折口説である。先生は「ノリト」という言葉を頻繁に使いながら、それを自明の語のように使われていて、概念まで説明されていない、というのが私の不満だった。

「㠯」字形載書説は殷王朝の支配形態の捉え方と密接な関係がある重要な問題である。言い換えれば、殷の支配形態と切り離しては、載書説

は成立しない。このことを理解している人はあまりいないのではないか？

今回、周原甲骨の背景にある殷周関係について考えているうちに、殷の支配形態の問題が重要な鍵を握っていることに気付いた。具体的には研究所の紀要を参照していただくことにして、ここで一言しておきたいことは、先生が殷と周との支配形態の違いを、宗教的な支配と政治的な支配との違いとされながらも、そのような支配形態の転換がどのようにしてなされたのかということにまでは言及されていなかった。おそらくそこまで意識化されていなかったのではないかと、僭越ながら推測する。そのような殷の宗教的な支配の仕方と、周の政治的な支配の仕方との違いが象徴的に現われているのが、殷の載書と周の載書との位相の違いだということに私はようやく思い至ったのである。

前者の載書が「㞢王事」という形で発せられ、異族が殷王朝の祭祀を受け入れるどうか、つまり宗教的に殷に従属するかどうかを問うものであったのに対して、後者の載書は「冊令」あるいは「命」という形で発して、西周王朝の官職に任命するという性格をもっていた。これはつまり官職任命式を通じて諸氏族を西周王朝のヒエラルキーの中に組み込むという政治的な発想でもって行なわれたものであった。ここに殷の宗教的支配と周の政治的支配との発想の違いが象徴的に出ているのである。

こう考えてくると、それ以前には口頭で発せられていた王命が、西周中期の穆王期から文書（載書）をともなって発せられ、任命式を行なうようになった意味も大変よく分かるのである。このことについては何れ改めて具体的に論じたい。

私は締切りが間近に迫る十月二十九日（日）、出張で出かけた先にも原稿を携帯し、合間を見て最後の手直しをしていた。そして、もう手放してもよさそうだと見切りをつけ、帰宅後も再度読み返した後の午後十二時少し前に脱稿した。

先生の死を知ったのは十一月二日の新聞紙上であった。密葬の行なわれた十一月一日は講義の日で何も知らずに授業を終え、翌日の新聞ではじめてそのことを知ったのである。新聞は十月三十日（月）午前三時四十五分に亡くなったと報じていた。衝撃が走ると同時に、その時間の直前に自分が何をしていたかを思い返しながら、幻想の中で先生にお会いしているような気分になった。

中国では先生の著作集の翻訳がようやく始まった。現在は一般書の「漢字」関係のものに限られているが、専門的な主著の「金文通釈」も計画されているとのことである。白川文字学は古代における日中両文化あるいは東アジア文化の共通性を想定しながら構築された体系的な文字学であることは言うまでもない。古代における日本と中国との文化的共通性を強調しようとして、日本の民俗学の知見を用いて説明されることも多いため、日本的な解釈を加えられているかのように受け取る人もあるようだが、白川文字学の原点とも言うべき『甲骨金文学論叢』に収められた論文を読めば分かるように、実際には中国の文献を実に綿密に読まれた上でなされているのである。

近年、経済学的な観点から〈東アジア共同体〉構築の可能性について議論されるようになった。この度の議論は戦前の〈大東亜共栄圏〉の議論とも大きな差異がある。しかし肝要なのは、〈東洋〉と呼ぶにしろ〈東アジア〉と呼ぶにしろ、文化的な共通性を色濃くもった空間がかつて存在したという歴史を〈われわれ〉が共有することである。先生の著書の翻訳によってそのような認識が中国でも深まれば、〈東アジア共同体〉における共属意識も現実的なものとなるであろう。その意味で、《白川静記念 東洋文字文化研究所》の果たす役割は重要だと言わねばならない。白川文字学の普及も大切なことだが、白川文字学の本質を見失わないように、今一度文字学の原点に立ち返った上で、深化と発展にも心がけていく必要があることを訴えて結びとする。

（本学文学部非常勤講師）

白川静先生の経歴

出生

一九一〇（明治四三）年四月九日　福井県福井市生まれ

学歴・学位

一九三六（昭和一一）年三月　立命館大学専門部文学科国漢学科卒業
一九四三（昭和一八）年三月　立命館大学法文学部漢文学科卒業
一九六二（昭和三七）年三月　文学博士

経歴

一九三五（昭和一〇）年一一月　立命館大学専門部在学中に立命館中学教諭となる。
一九四三（昭和一八）年　九月　立命館大学予科教授となる。
一九四四（昭和一九）年　四月　立命館大学専門部教授となる。
一九四八（昭和二三）年一〇月　立命館大学文学部助教授となる。
一九五一（昭和二六）年一〇月　日本甲骨学会の結成に参加。
一九五二（昭和二七）年　一月　古代学協会の設立に加わり、機関誌『古代学』を発行する。
一九五四（昭和二九）年　三月　立命館大学文学部教授となる。
一九六九（昭和四四）年　三月　文化庁文化財保護審議会臨時専門委員となる。
一九七六（昭和五一）年　四月　立命館大学文学部特別任用教授となる。
一九八一（昭和五六）年　四月　立命館大学名誉教授の称号を受ける。
一九八四（昭和五九）年一一月　毎日出版文化賞特別賞を受ける。
一九九一（平成　三）年一二月　菊池寛賞を受ける。
一九九六（平成　八）年　二月　京都府文化特別功労賞を受ける。
一九九七（平成　九）年　一月　朝日賞を受ける。
四月　文字文化研究所所長・理事長となる。
一九九八（平成一〇）年一一月　文化功労者として顕彰される。
一九九九（平成一一）年　三月　「文字講話」を始める。
（「続・文字講話」として二〇〇五年に至る）
一一月　勲二等瑞宝章を受ける。
二〇〇〇（平成一二）年一二月　井上靖記念賞を受ける。
二〇〇二（平成一四）年　一月　福井県名誉県民賞を受ける。
二〇〇三（平成一五）年一一月　京都市教育功労者として表彰される。
二〇〇四（平成一六）年一一月　文化勲章を受ける。
二〇〇六（平成一七）年　三月　福井市名誉市民の称号を受ける。
五月　立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所設立。名誉研究所長となる。
一〇月　京都市名誉市民の称号を受ける。

主な著作

『字統』『字訓』『字通』『常用字解』『人名字解』（以上、平凡社）
『白川静著作集』全十二巻（平凡社）
『金文通釈』（白鶴美術館）
『説文新義』（五典書院）
（以上、平凡社『白川静著作集別巻』として修訂出版）
『漢字』（岩波新書）
『詩経』『漢字百話』（中公新書）
『孔子伝』（中公叢書）
『中国古代の文化』『中国古代の民俗』（講談社）
他、論文・著書多数

二〇〇六年度 学術研究事業運営委員会の活動

研究員　芳村　弘道

二十世紀以降の東アジアにおける漢字研究の総合調査

この調査研究は、二〇〇五年度の後半期に計画案が出され、二〇〇六年度から始動したものである。概要については、すでに当研究所のホームページ上にも示されているが、ここにそれを抄録し、併せて進捗状況を報告しておく。

二〇世紀このかた漢字文化圏に属する国々で行われた漢字研究について、論文・著書・資料集などに関する情報を部門ごとに集大成し、近一〇〇年余の漢字研究史を構築するものである。この研究活動は、情報のデータベース化であるので、単に部門別研究史を提示するに止まらず、研究者ごとの情報も容易に提供できる。また検索機能により、自在に情報を取り出せるように工夫し、二〇世紀以来の漢字研究の情報をすべてこのデータベースに備え、内外に発信してゆこうと計画している。情報内容は、以下の一〇部門としたい。

①甲骨学　②金文学　③説文学　④字書・辞典　⑤音韻学　⑥訓詁学
⑦書法　⑧漢字文化など　⑨日本との関連　⑩漢字教育・行政

目下、①について日本における甲骨学研究のデータ入力をすでに開始しており、二〇〇七年四月下旬に正式に公開する。

本計画の対象は漢字研究全般に及ぶので、通常の日本語用文字コードだけでは扱いきれない。そこで、世界共通の文字コードであり、多種の漢字を扱いうるUnicode（ユニコード）を用いることができる検索CGIを使用した。また、ユニコードの使用により、キーワードとして簡体字・繁体字の情報も付加することができ、日本国内だけではなく、中国や台湾などからのアクセスにも対応が可能となっている。

データベースは、インターネットの下記のアドレスで公開の予定である。

「漢字研究データベース」　http://www.40net.com/kanji/index.html

研究会報告

二〇〇六年一一月一二日午後一時から当研究所の第一回研究会が衣笠キャンパス修学館二階第研究室にて開催された。今回は下記の通りの研究発表が行われ、それぞれについて発表者と参加者との意見交換が活発になされた（午後五時半終了）。

甲骨占卜の問答形式　落合　淳思
卜辞に見える「伊尹」の呼称に関する試論
―卜辞中の「伊水」との結びつき―

周原出土甲骨の歴史的位相　阪谷　昭弘
―殷周関係論に向けて―

中国無文字民族社会の文字論　高島　敏夫
―リテラシー論から見る文化資本の現状―

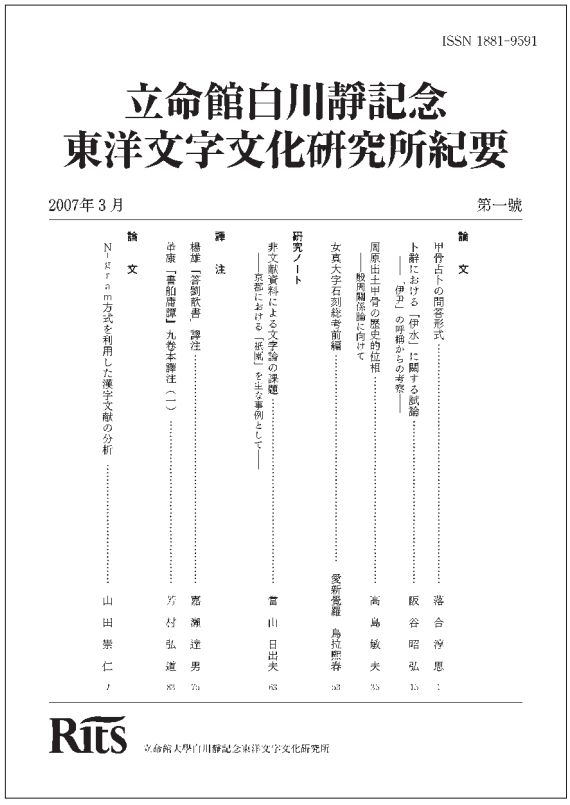
非文献資料による文字論の課題　谷口　裕久
―京都における「祇園」を主な事例として―

當山日出夫

（敬称省略）

「立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要」第一号の発刊

「立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要」第一号が二〇〇七年三月に発行された。掲載論文等は以下の通り。この記念の創刊号を是非、御一読下さるよう御願い申し上げる。



ISSN 1881-9591

立命館白川静記念
東洋文字文化研究所紀要

2007年3月　第一號

論文
甲骨占卜の問答形式……落合淳思
卜辭における「伊尹」に關する試論
――「伊尹」の呼稱からの考察――……阪谷昭弘 15
周原出土甲骨の歴史的位相
――殷周關係論に向けて……高島敏夫 35
女真大字五刻総考前編……愛新覺羅 烏拉熙春 53
研究ノート
非文獻資料による文字論の課題
――京都における「祇園」を主な事例として――……富山日出夫 83
譯注
揚雄『答劉歆書』譯注……嘉瀬達男 73
也康『書和唐課』九卷本譯注（一）……芳村弘道 85
論文
Nirem方式を利用した漢字文獻の分析……山田崇仁 1

Rits　立命館大學白川静記念東洋文字文化研究所

研究員の主な研究活動

○上野　隆三

「中国明清白話文学研究」

論文　「ローマ国立中央図書館所蔵広東俗曲『五郎入寺』について」（『ヨーロッパ現存中國學資料の研究』平成一二～一四年度科学研究費補助金基盤研究（B）（2）研究成果報告書・二〇〇七）

『漢書故事大全』校定稿」（『ヨーロッパ現存中國學資料の研究』平成一二～一四年度科学研究費補助金基盤研（B）（2）研究成果報告書・二〇〇七）

講演　「ヨーロッパで中国古典書籍を探す」立命館孔子学院講座・第8回（二〇〇六年九月三〇日）

○小森　伸子

「日本語書字につながる描線産出の習得過程
――「ストロークの単位」の成立から見た検討――」

幼児期の描線発達における質的な変化をとらえる視点として、「ストロークの単位」を導入し、その妥当性について検討した。「ストロークの単位」が成立している状態とは、線を一つの単位ととらえ、始点から終点を制御された動きをもって産出できる状態をさす。紙へのインクの滲みを指標に行っていた「ストロークの単位」の成立の有無の検討を、今回は筆圧計を用いて検討した。その結果、筆圧計の結果と先行研究の結果は一致せず、「ストロークの単位」の成立の有無に関して、筆圧の違いからの検討は難しいことが明らかとなった。原因としては、装置のなじみのなさ、測定の精度等があげられる。今後は筆圧計の問題を改善していくと共に、他の指標を使ってストロークの単位についての検討を行っていく予定である。

論　文　「幼児の描線発達と「ストロークの単位」の成立との検討」（「立命館文學」第五九九号）

学会発表　「幼児期の描線発達における「ストロークの単位」の成立に関する検討②　――筆圧を指標にした検討――」（第18回日本発達心理学大会発表論文集）

○清水　凱夫

「六朝文学研究」

論文　「李善注における二、三の問題點」（『松浦友久博士追悼記念　中國古典文學論集』二〇〇六年三月、研文出版）

○深谷　圭助

「漢字学習における手書き電子教材を用いた自学システムの開発」

本研究では、漢字学習において、手書き電子教材を用いることによる新しい自学システムについてその効果について検証した。

・児童の手書き電子教材の使用状況について

児童の手書き電子教材の使用状況については、「漢字の時間」や休み時間に任意で使用させる機会を設けるなどした。児童の手書き電子教材に対する関心は高く、休み時間に電子教材を用いて漢字学習に取り組む児童は多かった。三年生の児童に対し、夏休みなどの長期休業中、タブレットPCを家庭に持ち帰り、自学教材として手書き電子教材を用いることができるようにしたところ、被検者の76％の児童が、同教材を用いて漢字学習を行っていたことが分かった。

・手書き電子教材を用いることによる筆順指導の成果について

日本漢字能力検定試験を全校児童（三六七名）で受験をした。結果は100％の合格率であった。特に、筆順に関しては合格者の平均正解率を上回る成績であった。

二〇〇七年二月に博士（教育学、名古屋大学）学位を取得（学位論文題目「近代日本における自学主義教育の研究」）。

○本田　治

「宋代水利史研究」

論　文　「知鄞県時代の王安石の水利事業について」（『立命館文學』五九八号、二〇〇七年二月）

事典項目　樺山紘一編『歴史学事典第一三巻　生産と所有』（弘文堂、二〇〇六年四月）「飢饉（中国）」

研究発表　「寧波の水利調査」立命館東洋史学会大会、二〇〇六年八月二七日　ディスカッサント・コメント・ペーパー

『東アジア海域交流史　現地調査報告―地域・環境・心性』一号（現地調査研究部門、二〇〇六年一二月）。

○芳村　弘道

「唐代文学研究・漢籍書誌学研究」

編著書　『分類補註李太白詩』三（二〇〇六年七月、汲古書院）

論　文　「朝鮮本『夾注名賢十抄詩』中の「梁山伯祝英臺伝」と「梁祝故事」説唱作品との関聯」（『松浦友久博士追悼記念中國古典文學論集』二〇〇六年三月、研文出版）

「静嘉堂文庫所蔵古鈔無注本『文選』巻十残巻叙録」（二〇〇七年二月「立命館文學」第五九八号）

「老いを生きる白居易」（二〇〇七年三月、大谷大学「文藝論叢」六八号「若槻俊秀教授退休記念中国学論叢」）

「静嘉堂文庫所蔵古鈔無注本『文選』巻十残巻校記」（二〇〇六年一二月「學林」第四四号）

資料紹介

二〇〇六年度 文化事業運営委員会の活動

運営委員　志垣　陽

文化事業運営委員会では、研究所設立の二年目にあたる二〇〇六年度に、以下の活動を展開した。白川文字学の一般への宣伝と児童・生徒への啓蒙が主な目的である。

第一回立命館白川静記念東洋文字文化賞（立命館白川静賞）

第一回立命館白川静賞の選考が二〇〇六年三月に行われ、二件への授賞を決定。表彰式が同年六月に行われた。（詳細は別項に）現在、第二回立命館白川静賞の選考中である。

附属校との連携による漢字学習方法の開発

当研究所では、初等・中等教育機関を擁する本学園の特色を活かし、附属校の教諭との連携による児童・生徒向け漢字学習方法の開発を行っている。

また、立命館宇治中学校の白川文字学による漢字教育が文部科学省「平成十八年度　教育改革モデル事業」に採択され、研究所は、①漢字学習に関する講演・体験授業の講師選定、依頼、②図書室での展示企画「白川文字学コーナー」への、展示物の選定、貸与、③生徒による漢字カードおよびテキスト制作の指導に協力した。

大学の他組織との連携事業

二〇〇六年八月、京都府立堂本印象美術館（指定管理者　学校法人立命館）で開催された小中学生向け企画に協賛した。企画展「花鳥風月のこころ」で展示されている絵画約六十点の中に描かれた動物を探す「夏休み動物さがし」参加者へのプレゼントとして、堂本印象画伯の動物画と白川先生研究による動物の名の漢字の成り立ち等を組み合わせたカードを作製、好評を博した。

同年十月下旬から十一月初旬の二週間には、立命館大学国際平和ミュージアムとの連携で平和と言葉について考え、表現しようという催し「平和ってなに色？　文字・活字文化の日　特別企画」を開催した。平和への願いを一字で表すコーナーを設け、参加者には虹の七色等の漢字について解説したカードをプレゼントした。また当研究所の紹介コーナーを設け、研究所の紹介や白川先生の著作や手書き原稿、甲骨文字の書かれた亀甲や獣骨（レプリカ）や青銅器「毛公鼎」の金文拓本等を展示した。

一般向け事業

二〇〇七年三月、京都市教育委員会主催の「みやこ子ども土曜塾」事業の一つとして「京都漢字探検隊　第一回　漢字ジェスチャー大会」を実施した。毎回、一つのものをテーマに（人、動物、天気、衣服等）座学ではなく、実際の物を見たり、体験したりして漢字の成り立ちと結びつけて学習するものである。二〇〇七年度は、動物園や産業展示施設等と連携するべく、企画を進めている。

二〇〇七年度は、既存事業の継続・発展とともに、一般向け講座の企画実施を目標に活動を展開していく。

第一回立命館白川静賞

選考委員長　高杉巴彦

この賞は、立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所が、東洋文字文化に関する研究、普及および教育活動等の奨励支援のため、優れた個人および団体の業績を表彰することを目的として、二〇〇六年度に制定されたものである。

第一回「立命館白川静記念東洋文字文化賞（立命館白川静賞）」選考委員会は、締め切りの二〇〇六年二月末日までに各団体から推薦のあったものを審議した。委員会では、まず本賞の設立趣旨に基づき、推薦のあった候補を以下の三つの領域に基づいて業績を評価・審議することが決定された。

①白川静名誉所長の学問の継承・発展を目的としたもの。
②東洋文字文化の研究・調査にかかわるもの。
③東洋文字文化の教育・普及にかかわるもの。

この決定に基づき推薦された候補の業績を分類し、全会一致で以下二件に贈ることを決定。二〇〇六月三日、立命館大学末川記念会館にて表彰式を行い、白川静名誉所長より、表彰状と副賞が授与された。

受賞者　沈慶昊（韓国・高麗大学校教授）

対象業績　한자　백　가지　이야기（ハンジャ　ペッカジ　イヤギ）

二〇〇五年　韓国・牡牛座（白川静著『漢字百話』　中公文庫二〇〇二年／中公新書一九七八年、の韓国語翻訳版）

受賞者　漢字字体規範データベース編纂委員会（代表　石塚晴通　北海道大学名誉教授）

対象業績　「漢字字体規範データベース」

推薦のあった研究・活動の中には、最終的に受賞には至らなかったものの、優れた内容のものが多数有り、東洋文字文化に関する長年の活動が地道に行われてきたことや、日本国内で外国人が漢字を理解する必要性が有り、そのために様々な試みや工夫がなされてきたことを改めて認識した。

本賞では、今後も上述の通り三つの領域に基づく審議を行うこととした。これは、本賞が白川文字学だけにとどまらず、広く東洋文字文化の分野における業績を対象とすることを示す。これからも多数の応募があり、優れた業績を表彰できることを期待している。

白川静先生と受賞者の
石塚晴通氏（左）沈慶昊氏（右）

表彰式の記念写真
（前列左から3人目が白川静先生）

◆受賞者のコメント

韓国・朝鮮も漢字文化を開花させ、数多くの古典を残した。新しい古典学の樹立には、その基礎である文字学の研究が必要。『漢字百話』には、一定の意義が認められたと思う。これからも白川先生の教えに従い、漢字文化の共有が各国の相互理解を容易にしたという歴史的事実の探求に参加したい。

（沈慶昊氏）

白川静先生の東洋文字文化に対する熱意に共鳴しているので、その第一回受賞者に選ばれたことを嬉しく又名誉と感じている。今後ともデータベースの拡充に努め、時代的にも地域的にも漢字文化の基礎資料を提供して行きたい。（漢字字体規範データベース編纂委員会代表　石塚晴通氏）

編集後記

○小誌第二号にして、名誉所長の白川静先生追悼の文章を掲載するとは全く思いもよらないことです。昨年六月の「第一回　立命館白川静賞」授与の御挨拶で「東洋」と「文字」について御所感を述べられた熱意溢れるお声、また翌七月の研究所の会議に御臨席下さったお姿を思い出すと、痛恨やるかたかたありません。白川先生の御逝去に対し、多くの人が学界の「巨星墜つ」という思いを抱かれたことでしょう。当研究所にとっても本当に偉大な存在を失いましたが、御遺志をしっかりと受け継ぎ、「東洋文字文化」の発展に寄与すべく活動して行きたく存じますので、さらなる御理解、御支援をお願い申します。

○白川先生追悼文の最初には、事務局による「白川先生ご逝去」を掲載しました。去る十二月七日に行われた「白川静先生お別れの会」の概要を紹介するほか、「白川文字学」についてなど御業績の一端が回顧されています。

○新研究所長の川口清史総長からも「白川先生追悼の言葉」を寄稿いただきました。「我々の目標としてまだまだご活躍していただきたかった」との一節は、誰しも共通の思いとして感慨深く胸に迫ります。

○加地伸行学外顧問の「白川先生の御功績」は、白川先生の学問体系を詩経学・甲骨金文学・説文学・日本古代文学の四分野から御紹介なされたものです。「お別れの会」の限られた時間で述べられた文章ではありますが、これほど粋要がまとめられた「白川学」理解の一文は他になかろうと思います。

○白川先生と長い御親交のあった西川富雄名誉教授は、一昨年ご出版の『桂東雑記Ⅲ』に載せられた短歌二首を通して御在職時代の先生を偲ばれています。また受業生のひとりで、主として金文学を研究される高島敏夫本学非常勤講師は、「白川文字学」のなかでも最も重要な学説である載書字説のもつ意義を明らかにされた近作論文の執筆に触れ、先生を追慕されています。追悼文の執筆依頼に応じてくださったお二人に感謝申し上げます。

○二〇〇六年度の「学術研究事業運営委員会」活動報告を芳村弘道研究員が行いました。大きな事業としては「立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要」の発刊です。この創刊号には白川先生から御寄稿戴ける予定でした。余りにも突然の御逝去が悔やまれてなりません。

○また「文化事業運営委員会の活動」は志垣陽運営委員の執筆です。主に附属校や大学他組織との連携による活動が報告されており、当研究所が果たしている学園での活躍の広がりが紹介されています。また、昨年行われた「第一回立命館白川静賞」の選考報告、表彰式のあらましは高杉巴彦選考委員長によるものです。

○昨年九月二十七日に当研究所のホームページの内容を御確認いただくため、白川先生を拝訪しました際、先生は「白川賞」表彰のことを御満足げにお話しになられました。それも加地顧問の御一文にあるごとく、「もはや一場の夢」となってしまいました。ここに改めて、御冥福を謹んでお祈り申し上げます。

（芳村記）

○三月に実施した「京都漢字探検隊―漢字ジェスチャー大会」には多数の参加申し込みを頂き、急遽定員を増やしました。白川先生の提唱された漢字の体系の一端や、形のないものを表現した古代人の知恵を理解いただけたことと思います。「漢字探検隊」は、出張講義や共同開催も行います。ご希望の方は事務局・久保までご連絡ください。

（久保記）